

【熊本県PTA連合会賞】

「ご先祖さまが作った土地」を読んで

津奈木町立津奈木小学校 5年 高木 大幹

仕事から帰ってきたお父さんが、「この前の大雨で、曾木発電所遺構の壁がこわれたんだって。」と悲しそうに言った。それを聞いて、ぼくは道徳で習った「ご先祖さまが作った土地」のことを思い出した。お父さんは水力発電所で働いていて、曾木発電所遺構はその発祥の地として何度か連れて行ってもらっていた。

話の登場人物である翔太は、「新しい堤防があるから、古い堤防はいらない。」と言っていた。ぼくも心の中でそう思った。理由は、今は使っていないのでじゃまだと考えたからだ。しかし、読んでいくうちに翔太のじいちゃんの時代には、生活が楽じゃなく、干拓するのが大変だったことがわかった。

「昼も夜も関係なく、手作業でどろをかごいっぱいに入れてかたにかついだ。7メートルの段々はしごを上って、命がけで運んで作ったんだ。」と翔太のじいちゃんと言った。すると、それを聞いた翔太は、「それなら、横島はご先祖さまが作った土地ってことたい。僕たちのご先祖さまってすごいね。」と言った。この場面を読んで、ぼくにも似た経験があることに気がついた。運動場そうじで土を運んだとき、とても重くて大変だった。それなのに、機械もない時代に、高さ7メートル、長さ5.2メートルもの大きさの堤防を作るために、何回もどろを運んだのだらうと思うと、想像ができないほど大変だったと思った。だから、「古いからと言ってこわすのは、悲しいことなんだな」と気づいた。

翔太の町では、堤防を取りこわさず残したいという思いから、今でも草かりや清そう作業を続け、「潟担い節」というおどりでご先祖さまの苦労を忘れないようにずっと伝え続けてきた。そして堤防が国の重要文化財に決まり、堤防を残せるようになると、みんなもじいちゃんも大喜びしていた。

ぼくは、「新しいものがあるなら使っていない古いものはじゃまだな」と思っていたけれど、ご先祖さまが苦労して作ってくれたことを知ると、「大切に守っていききたい」と思うようになった。ただ取りこわすだけでなく、どうやって作られたものなのかをしっかりと知ることと、そのことを知らない人たちにきちんと伝えていくことが大事なことだと思った。ぼくのお父さんが大切にしている曾木発電所遺構のことも、ぼくもしっかり知って、きちんと伝え、そしてずっと守っていききたい。